

「わたしの羊を飼いなさい」

ヨハネによる福音書 21 章 15-25 節

復活されたイエスさまは、ガリラヤ湖畔で、弟子たちといっしょに朝の食事をされました。その後、イエスさまは、ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と三度尋ねられました。その三度の問いに対してペトロは、「悲しくなった」とあります。

なぜペトロは悲しくなったのでしょうか。それは、ペトロがこの時、自分がしてしまったことを思い出させられたからです。以前のペトロは、弟子たちの中で自分が一番イエスさまを愛していると自負し、そのことを誇っていました。しかし、イエスさまが捕らえられた時、ペトロは三度も主を知らないと否定してしまったのです。そのことは、ペトロの心に重くのしかかっていた。それが今、再び鮮明にされたのです。

けれども、イエスさまは、自分のことを裏切って「知らない」と言ってしまったペトロを裁こうとしておられるのではありません。そうではなく、イエスさまが三度「わたしを愛するか」と問われたのは、ペトロに対するご自身の不変の愛を示し、主イエス・キリストとの愛の交わりの中に入れられていることを確信させるためでした。三度「イエスなんて知らない」といったペトロを完全に赦し、主の愛に応えて生きる新しい者にしようとされたのです。

イエスさまから「わたしを愛するか」と問われたペトロは、「わたしはあなたを愛しています。」と率直に答えることができずに、「わたしがあなたを愛することは、あなたをご存知です。」と答えることしかできませんでした。

この時、ペトロは、イエスさまへの愛を否んだ自分のことを嫌と言うほど思い出していたはず。しかし、そういうペトロであることを知りつつ、いや知っているが故に、イエスさまはなおもペトロを愛してくださり、十字架に掛かって死んでくださったのです。そして、復活して自分たちの所に来てくださり、「平和があるように」と語りかけ、励ましてくださる。その現実を前にして、ペトロは、もはやイエス・キリストの愛を疑うことはなかったでしょう。

かつて、ペトロは自分を信じていました。イエスさまを愛し、死んでもイエスさまについて行くと思っていた自分を疑うことなんてありませんでした。しかし今、彼はそういう自分を信じてはいません。イエス・キリストの愛を信じている。真実の愛な

どない自分をそれでも愛してくださる、いや、それだからこそ愛してくださる主イエス・キリストを信じている。そして、その主イエスが、自分のことを何もかもご存じであることを信じているのです。自分の中には、かつて今も、イエスさまへの愛がありました。そして、かつては、イエスさまが知っている以上に、自分のことは自分が一番知っていると思っていました。でも今は、自分が自分を知らる以上にイエスさまが自分のことを知っていてくださっている。そのことをはっきりと知らされたのです。自分の愛が、どのようなものをイエス・キリストが知っていてくださっている。そのことにペトロは委ねているのです。

そして、その主イエス・キリストが、「わたしの小羊を飼いなさい」「わたしの羊を養いなさい」「わたしの羊を飼いなさい」と三度も命じられたのです。御自身が十字架の血をもって罪から救い出した御自分の羊をペトロに託されたのです。これほどの信頼があるでしょうか。けれどもそれは、ペトロがその任に堪えうる者であったからではありません。イエスを三度も知らないと言ってしまう人が、どうして自分の羊のために命を捨てることができるでしょうか。できないのです。では、できないことを承知で、イエスさまはこの務めをペトロに与えられたのでしょうか。いいえ、そうではありません。イエスさまは、この務めをペトロに与えるにあたって愛を問うたのです。これが大切です。主イエスの羊を飼うためには、意志の力、指導力、知識、自己犠牲、そういうものが求められているわけではありません。確かに、そのような能力があれば、それに越したことはありません。しかし、イエスさまが問うたのは愛なのです。でもそれは、私たちが自分の力で自信を持って“わたしはあなたを愛しています”と告白することではありません。疑い迷い、弱く欠けの多い私たちが、それでもキリストに愛されていることを知り、“主よ、感謝いたします。こんな私ですがよろしく願います”と、私たちのすべてをご存知である方に自分を委ねることなのです。そして、そこにすべては与えられていくのです。イエスさまが与えてくださるのです。